

Hans Ammerlich

マックス I 世ヨーゼフの青少年期と教育

「親愛なるマックスよ、私のすべての望みは貴方が私の期待に応えてくれることにかかっています ...」。「いつの日か貴方はこの家系の幸運に気が付くでしょうし、また立派な人達の尊敬を集めて最も幸せな人となるでしょう ...」。1764年にプファルツ - ツヴァイブリュッケン公爵クリスチャン IV 世が甥のマックス・ヨーゼフに宛てたこの言葉は¹、プファルツ - ビルケンフェルト系がプファルツ - バイエレンの遺産を相続するだろうという見通しがすでに立っていた時点で発せられたものである²。パーヴィアの契約（1329年）に従って、プファルツ系はバイエルン系を継承することになっており、ヴォルフガング公爵の遺書（1568年）に従って、1734年からプファルツ - ツヴァイブリュッケンで統治をしていたプファルツ - ビルケンフェルト系がプファルツ - ズルツバッハ系を継ぐことになっていた。ヴィッテルスバッハ家のバイエルン系はこの間にはまだ子供のいないマックス III 世ヨーゼフ（1727-1777年）が統治していた。プファルツとラインのヴィッテルスバッハ家の領地はプファルツ - ツヴァイブリュッケンを除き 1743年から選帝侯カール・テオドアが治めていたが、彼には嫡出の後継者がいなかった。カール・テオドアに一番近い父系親族のクリスチャン IV 世が近いうちにプファルツとバイエルンの両方の選帝侯領を相続すると見られていた。クリスチャン IV 世は踊り子のマリアンヌ・デ・カマッセ、後のフォン・フォルバッハ伯爵夫人、と身分違いの結婚をし、この結婚による二人の息子には相続権が無かった³ので、クリスチャンの相続人としては彼の弟プファルツ伯フリードリヒ・ミヒャエルとその夫人フランツィスカ・ドロテア・フォン・プファルツ - ズルツバッハのとの間の二人の息子が該当した。上の息子カール・アウグストは 1746年に生まれ、後にバイエルン国王となる下の息子マックス・ヨーゼフは 10年後の 1756年にマンハイムで生まれた。

彼らの両親の結婚生活は幸せなものではなかった⁴。フリードリヒ・ミヒャエルは最初フリードリヒ大王とその同盟軍に対してボヘミア、ザクセン、フランケンで作戦行動する帝国軍の帝国陸軍元帥および総司令官として働き、それからハンガリーとボヘミアに投入されていたが、何年もマンハイムとツヴァイブリュッケンから遠ざかっていた。彼らの結婚はこの間に崩壊した⁵。フランツィスカ・ドロテアはマンハイムで俳優とねんごろになり、妊娠した。クリスチャンは彼女を宮廷から追い出し、修道院に入れた。彼女はまずメッツの聖ウルスラ会の修道院に入れられ、それからボネヴォワイエ（ルクセンブルク）のアウグスティノ会修道院に移された。カール・テオドアはこの義妹を修道院生活から解放し、彼女のズルツバッハ城を寡婦暮らしのために与え、彼女はそこでなお 34年間孤独な生活を送った。

フリードリヒ・ミヒャエルは妻と別れてから 14歳の長男カール・アウグストが母親のいなくなったことに気が付かないように教師のフォン・エーベルシュタイン男爵と共にとりあえず 1760年の出陣に連れて行った⁶。弟のマックス・ヨーゼフはまだ幼く、家庭内の出来事を理解できなかった。1761年初め、クリスチャン IV 世は甥のカール・アウグスト（図 6）を彼の教師と共に教育のためパリの宮殿に連れて行った。マックス・ヨーゼフは当初姉のアウグステと一緒にマンハイムの宮廷に留まっていた⁷。カール・アウグストはパリでまともに教育されなかった。つまりカール・アウグストは、誰にも指図は受けないとうぬぼれ、自分の機嫌を損ねる人物に会ったときには自分の特権的な地位を遠慮会釈なく、必要な場合は悪意をもって利用するようわがままで、高慢な若者になってしまった⁸。

やがてクリスチャンはカール・アウグストのために新しい教師を捜さなければならなくなった。パリが気に入らず、カール・アウグストの面倒を見る気がなくなったエーベルシュタインの代わりに、クリスチャンはフランス将校、Agathon de Guynement Chevalier de Keralio⁹ 中尉を見つけた。クリスチャンは弟にケラリオのことを「非常に良い兵士」であり、教養と知識があり、これ以上ない穏やかな性格であるが精力的でもあり、愛すべき人物であり、高潔でさらに非常に良い貴族である。ケラリオは風采も良く、貴方の息子の身体も鍛えてくれるだろう。また彼は貴方の息子をちゃんと取り扱い、必要な場合以外は言いなりにはならないだろう ...」と伝えている¹⁰。クリスチャンはこのルソーの崇拜者を甥の理想的な教師と見て

いた。彼は1761年ボンパドール夫人に「私は甥が私の跡継ぎになったときに陛下に対する私の忠節と献身も継承してくれるよう、フランス人の教師を選びました…。これはまた彼をマンハイムから遠ざけるように努力した主な理由でもあります。私の意見では宮中伯公子が持っていなければならない考え方を抱かせるように十分な心遣いがされないのではないかと心配しています」と書いている。¹¹ ケラリオが若い公子のために作成した教育計画¹²は宗教を教育の基礎に置くものであった。¹³ さらに授業は数学、軍学、世界史および国史の知識を介して年代史および地学と併せて行うものであった。引き続いて語学と人文科学、その中にケラリオは古い作家の著作の読書、ローマ古代史や修辞学学習、さらに自然法と結びついた哲学、最後に現代史を考えていた、が行われることになっていた。授業の目標は若い公子の自覚および人間の知識を育成することであった。乗馬、ダンスおよび剣術の授業も予定されていた。

ケラリオはカール・アウグストの監督者として彼の教育の監督だけを考えていた¹⁴。協力したのは、ツヴァイブリュッケンにあるギムナジウムの教授で貨幣研究家のフリードリヒ・エクスター¹⁵、とゲオルク・フリードリヒ・ハイス¹⁶であった。授業は他の教師により、つまり宗教はアッペ・ピエール・ド・サラベール¹⁷また数学はレラッツ・ド・ランテネにより行われた。¹⁸

公爵は、実際にそうなったのだが、カール・テオドアの若い方の甥マックス・ヨーゼフがカール・テオドアの後継者になるかもしれないというちょっと有りそうもない可能性を計算に入れていたので、彼を教育のためツヴァイブリュッケンに連れていった。一番好ましいのはカール・テオドアとエリザベト・アウグステがマックス・ヨーゼフをマンハイムで育てることであった。彼らがどれほど嫌々子供をクリスチャンに任せたかは1761年10月3日のカール・テオドアの手紙が示している。「貴方が公子について貴方の弟と合意されたので、いつ彼を引き取らせるのがよいかは貴方次第です。この子は最も幸せな性格に生まれた魅力的な子供です。彼は良い方に引き取られるという幸運に恵まれているので、彼は立派になるはずです。貴方が注がれるあらゆる心配りが正しいものであったと分かることを確信しています。」¹⁹ 幼い公子にとってフォン・フォルバッハ男爵夫人は「ある種の代理母」²⁰となった。彼女は両親不在の問題を取り除こうと努めた。彼女自身の二人の息子、4歳のクリスチャンと2歳のフィリップは彼の友達になった。1762年4月ケラリオはカール・アウグストを伴ってパリからツヴァイブリュッケンに来て、マックス・ヨーゼフの教育も引き受けた。兄をこれ以上フランスに置いておくのは意味が無いし、ケラリオは両方の公子を教える必要があった。パリを去る前にケラリオはいくらかこの難しい生徒を良くする希望を抱いた。「今公子カールの心について私自身の心のように確信している…」²¹。しかしすぐにカール・アウグストが励ましの言葉に耳を貸さなくなり、罰を与えない限り言うことを聞かなくなったことが分かった。ケラリオは彼の教育に失敗したので、解職を願い出た。しかしケラリオは公子マックス・ヨーゼフの教育を引き受ける積もりであった。「…思い違いでなければ、彼の中にはあらゆる美点と才能の芽が眠っている。この公子の面倒を見ることによって、公子カールの教育に失敗したことは彼の反抗的な態度が原因であることを全世界に証明できれば満足である…。公子マックス・ヨーゼフのところに赴く準備ができており、自分を彼のところに導いてくれる瞬間を最大の期待をもって待っている…」²²

マックス・ヨーゼフの教育にはケラリオとランテネの他に、すでに公子カール・アウグストの教育に加わったハイスとサラベールが参加した。ケラリオがカールにしたようにサラベールはマックス・ヨーゼフのために詳細な教育計画を作成した。この計画はケラリオのものとは、数学と法学に力を入れていることおよび聖書、古典およびフランス史に特に重点を置いている点が異なっていた。²³ この授業の一部はハイスが担当した。彼はマックスの勉学が中断しないように旅行の際にも同行した。²⁴1763年初めハイスはマックスとマンハイムに旅行した。そこでマックスは父親に再会した。フリードリヒ・ミヒャエルは1月22日クリスチャンに、マンハイムの宮廷はマックスが来たので大変に喜んでいると書いている。「彼は勉強によって何も失っていません。というのはハイスが傍におり、彼はマックスにケラリオとアッペ・サラベールのものすべてを同時に教えているからです。マックスはまったく可愛いです…」²⁵ ハイスもまた幼い公子の可愛さに惹かれていた。「幼い公子について褒めそやす積も

りはありません」と1763年3月3日彼は学友だったイエレミアス・ヤコブ・オーバリン、のちに「シュタインタールの主任司祭」として高名なフリッツ・オーバリンの兄、宛てに書いている。「ただこの7歳の子供ほど愛すべきまた立派な性格を見たことがないと言いたいのです。彼はあらゆる人から好かれているのです...」。²⁶

マックス・ヨーゼフの愛すべき性格が将来その教育を容易にするだけでなく、彼が伯父のあまり年の違わない子供達と一緒に育つという環境がその教育に役に立った。そういうことで公子の教育過程で重要な模範と競争が欠けていなかった。²⁷

1764年初めツヴァイブリュッケンで天然痘が流行して多くの子供が死んだとき、マックス・ヨーゼフは用心のためハイスと共に再びマンハイムに送られた。「自分はここでは公子マキシミアンの唯一の監督者です」と彼はオーバリンに書いた。「公爵閣下、カール公子、彼の主教師フォン・ケラリオ騎士はツヴァイブリュッケンに残っています。自分がこの可愛い公子を扱う遣り方についてまったく満足して頂いていることを嬉しく思っています。また選帝侯閣下が4、5日前にこれについて満足していることを口にされたことは、我々のような貧しい身分違いの者が普通なら信用されないような宮廷にいただけに、なおさら嬉しく思います。自分は公子にどこへでもついて行きます。彼は自分を大好きで、自分も彼の態度と勉強にまったく満足しています...」。²⁸ ケラリオは彼の教育の仕事をつヴァイブリュッケンから詳細な手紙で続けている。²⁹ 1764年1月19日の最初の手紙では、「... 貴方は物覚えが早く、真面目です。人から好かれています... 貴方は神に対して責任があることを忘れてはなりません。すべての科目を勉強し、先生達を満足させなさい... どんな分野でもいい加減にやってはいけません。親愛なる公子よ、私は貴方に8歳の子供として話しているのではなく、一人の男として話しているのです。それは貴方の中に偉大な人となる芽がすでに認められるからです。貴方は既に宗教を持ち、困っている貧者への出来る限りの同情と貴方の義務を果たすための誇りを持っています。世間を知っている白髪交じりの誠実な友を信じてください...」。公子の最初の手紙は彼が真実を愛していることを示していた。「... 真実を愛する心により」とケラリオは1月22日に書いている。「貴方は良い人を徳の仮面を着けた者から、また真の賢者を表面的な知識だけしか持っていない人から、区別するでしょう... 貴方は偶然に公子として生まれました。この称号の故に人々は帽子をとります。あらゆる栄誉はただ貴方の生まれに拠っています。しかし貴方が不幸な人を助け、宗教に敬意を払い、宗教への尊敬を作り出し、芸術を奨励し、... 上位の人にはそれにふさわしいものを示し、同格の人とは人生のつきあいに必要な礼節と誠実と寛大をもって生き、下位の人には善意をもって受け入れれば、親愛なる公子よ、すべての心は貴方のほうに向かい、至る所で貴方を祝福し、愛することでしょう...」。3月15日ケラリオは手紙を次の言葉で始めている・「*Macte animo, generose puer, sic itur ad astra.* ハイスはこのラテン語の詩を説明してくれるでしょう。そして貴方がいつの日かそれを実現することに疑いを持ちません」。10日後彼は公子に悲劇「ブリタニクス」をお互いに読んだはずであること、当時公子がネロを残酷さと悪徳へと誘惑するナルシスをひどく嫌っていたことを思い出させた。

「さて公子よ、媚びる者はすべてナルシスであり、貴方に媚びる者は誰も貴方を破滅させるか裏切ろうとするものであるということをお分かってください」。4月29日にケラリオは公子に、ツヴァイブリュッケンに戻ってきたときに算数と地理学を教えるつもりだと予告した。それまでは書く練習をするか、同じ歳でフランス史を書いた、ルイ XIV 世の孫のブルグンドのルイのようにプファルツの家系の歴史を書くように言った。5月20日ケラリオは「5、6年後に著者が貴方であるプファルツの家系の歴史を印刷したならば貴方はどれだけ名声を博すでしょうか。しかしこれを実行するためには両方の言語で立派に書けなければなりません...」。第2言語についてケラリオは、幼い公子がマンハイムの宮廷に引っ越す前にシュヴェッツィンゲンで高名な歴史研究家ダニエル・シェプフリンの前で試験を行うことになっていた。この試験は行われたがその遣り方と結果は分かっていない。5月31日ケラリオは公子に最初の整体拝領が迫っていることを思い出させた。それ故に、彼はフランクフルトの神父が与えた教えを心に留めておくようにと書いた。「間違いなく彼は貴方とハイス、アッペ（サラベール）氏や自分のように話すでしょう」。マックス・ヨーゼフは悪ふざけを諦める必要があった。「O'Dune 氏や v. Riaucourt 氏が貴方をよい子か悪い子が観察していること、またシュヴェツ

ツィンゲンに来る見知らぬ人はじろじろ見られていることを考えなさい」。ケラリオはフリードリヒ・ミヒャエルのお供としてローマ王の戴冠に参列したフランクフルトからも手紙によってマックス・ヨーゼフの教育を継続した。マックス・ヨーゼフがツヴァイブリュッケンに戻ってきたらすぐに試験に備えて教えるつもりであった。³⁰

あらゆる予防措置を講じたにもかかわらずマックス・ヨーゼフは天然痘にかかった。6月終わりにはクリスチャンは祖母に、危険は去り、ケラリオがシュヴェッツィンゲンのマックスのところに行ったことを報告した。彼は回復したマックスに祝意を伝えた。³¹「貴方は幸運にも最も残酷な病気から回復しました。おめでとう。また私の生涯で幸福、希望および慰めを与えてくれた甥を持ったことに感謝します」。父親はマックス・ヨーゼフに非の打ち所のない態度で神に回復を感謝しなさい、と書いた。「貴方は選帝侯閣下にも大変感謝しなければならない。閣下はまるで父親のように振る舞ってくださった。まもなく貴方を抱けることを望んでいる...」。³² 公子は1764年8月29日に父親にシュヴェッツィンゲンから返事を出している。「...私の愛する伯父さんが...ここに到着しました。伯父さんは次の月曜日に私をツヴァイブリュッケンに連れ戻してくれます。体調は良く、15日前からまた勉強を始めています。病気の間やれなかったことに追いつくよう頑張ります..」。³³

1年半後の1766年春、マックス・ヨーゼフははしかを患った。しばらくして再び良くなり、10歳のマックスは勤勉に勉強した。³⁴ というのはマンハイムでの試験が迫っていたからであった。保養のため彼はクリスマスにベルクツァーベルンの祖母のところに行き、そこから父親と一緒にマンハイムに旅することが許された。「彼が来た」とクリスチャンは1767年1月に弟に書いている。「この旅はお行儀よくすることを条件に許された。彼はいつも良く振る舞ったが、この旅をしたかったので彼は勤勉と注意深さを倍増させた」。³⁵ 1767年2月半ば、マックス・ヨーゼフは予定されていた試験をマンハイムで受けた。³⁶ ケラリオはバイエルン公爵フランツ・クレメンス夫人宛に彼女の甥が「そこで勲章を着けて登場しました。イエズス会士であり、高名な測地学者である天文学者が幾何学の基本について試験しました。技術者が築城術について試験しました。どちらにしても彼は欠けているところを見せませんでした。私はこの試験に干渉したくありませんでした。普通よくやるように調教されたオウムを披露したと思われなくなかったからです。私は彼らに私の「エミール」を何の取り決めもしないで送り届けました。彼らは彼が勉強を入念に仕上げたことを知らなかったのです...」

と誇らしげに書いている。人前で彼は期待していたよりもよく振る舞いました。というのは彼に誤解されてはいけないと思って彼に少ししか、正確にいうとまったく礼儀と言われているものを教えなかったからです。選帝侯夫妻は彼と毎日顔を合わせているわけですが、私がいなくても、彼と分別のある話ができるだけに一層満足している、と確言してくれました。公子マックスがマンハイムで獲得した月桂冠はけっして無理に得たものではありません」。³⁷

彼の手紙はマックス・ヨーゼフの教育に際して、その地位の故にこの考えに常に従うことはできないことが分かっている、ルソーの小説「エミール」にある考えを考慮したことを示している。ルソーが貴族の息子は有用な人物になることはできないという意見を代表するにもかかわらず、ケラリオはこれに関して別のことを考えていた。つまり、マックス・ヨーゼフが顕著な天分を持っていないにしても「偉大な君主に必要な多くの知識を獲得して欲しい」と思っていたのである。³⁸

マックス・ヨーゼフの父、フリードリヒ・ミヒャエルは1766年11月に故郷に帰り、オッガースハイム城を拡張した。しかし子供達に尽くそうという彼の望みは果たされなかった。³⁹ 1767年6月彼はシュヴェッツィンゲンで病気になり、苦しんだあと8月15日に亡くなった。彼は「家族を仲直りさせる心の持ち主」であった。⁴⁰ もし彼がもっと長生きしていたらクリスチャン IV 世と彼の将来の相続人カール・アウグストとの間の緊張も現れなかったであろう。公爵がカール・アウグストを信頼しなかったことも不利に作用した。クリスチャンはマックス・ヨーゼフを完全に好きなように動かすことができ、彼が正しいと思っているように教育させた。

翌年の夏、彼はマックスをニンフェンブルクにあるバイエルンの宮廷に紹介した。彼は自分の妻を通じてプファルツ選帝侯夫人が「マックスはここで素晴らしく成功しています。誰もが彼を好きになり、兄と大いに違うことを認めています。兄（カール・アウグスト）について話すことはほとんどありませんが、あったとしてもその弟と比べるときだけです。兄のこ

とは弟に有利に働くだけです」と言っていることを聞いた。⁴¹ バイエルン公爵夫人マリア・アンナはマックス・ヨーゼフの今後の教育について助言を与えた。ケラリオが年の終わりにこの示唆に感謝を述べたとき、特に話題となったマックスの無感情について触れた。「多分私が彼に礼儀正しくするように教えなかったので、冷たいように思われたのでしょうか。あれこれに注意するように言ったことがないのです。というのはこのような教えられた礼儀正しさが必然的に偽善的な態度に進むのをいつも見てきたからなのです。かれがいろいろ比較し、考えるようになれば、そのとき初めて我々が育んできたような期待に応えるかどうか判定できると思っています...」。この手紙はその他にマックス・ヨーゼフの教育に関するケラリオの今後の展望を述べている。「この冬に乗馬を始め、それに続いて 1770 年には狩りができなければなりません。それでようやくフランスの秀才学校および砲術学校に行ける状態になります。そこへは公爵が公子を送ることを望まれており、またそこには現在若いフォン・フォルバッハ伯爵がおられます。このように彼は忙しいので悪いことを経験しません。これによって我々は弱みをさらけ出すような破綻から救われことになるでしょう...」。⁴²

翌年もマックスの教育に宛てられた。このことは 1770 年 8 月 6 日公爵クレメンス・フランツが子供を残さず死去し、カール・アウグストとマックス・ヨーゼフが多額の遺産を相続したときも変わらなかった。ケラリオは数年間勉強が邪魔されないようにマックス・ヨーゼフをツヴァイブリュッケンに留め置いた。兵役への準備はド・シンクレア男爵の "Maximes de guerre" を基礎として使用し、マックス・ヨーゼフはこれを翻訳して選帝侯カール・テオドアに送った。⁴³ しかしまたクリスチャンはマックス・ヨーゼフに時間を無駄にしてはならぬ、と注意した。「貴方はもうすぐ 16 歳になりますが、これは兵役を始める年です。貴方は今年メジエール（の陸軍学校）に行くことになります。それにふさわしく登場する状態ではない、ということはありません。もしそうなれば 2 度と起き上がれない転落の行為であり、自分自身に責任がある損害なのです。世間に礼儀正しく登場できるように、また私がそれに値するとこれまで認めてきた貴方の楽しみをやめさせなければならないようなことにならないように、真面目に励み、時間を良いことに使い、一生懸命にやりなさい」。⁴⁴

マックス・ヨーゼフはメジエールの陸軍学校に行くことになっているので、ケラリオは 1772 年 6 月 30 日若い公子の教育状況について、彼の従順さ、注意深さ、賢さおよび善意は賞賛に値すると報告した。⁴⁵ 「彼の心は単純、誠実で寛大です。彼がこの幸運な性格を保持すれば彼は非常に好かれるでしょう」。しかしケラリオの判定にはまた多くの留保が含まれていた。「彼の賢い頭ならもっと大きく進歩できたでしょう。残念ですが、彼は一人では勉強しようとしません。彼に準備した時間の多くはまったく失われました。その結果 1 時間でできるところに 3 時間から 4 時間の授業が必要です...。製図ではまったく進歩がありませんでした。彼は鉛筆をほとんど扱えなかったのです」。要塞の設計図に関してケラリオは満足できた。これに反して要塞の周りの施設については、指導されないと製図できなかった。「... きっちりした規則が無いと、私が時折自然の中で示した眼の前の個々の物をまとめることが出来ませんでした。」またダンスの時間でも、これは彼の態度の改善に役立つはずだったが、ほとんど成果が無かった。マックス・ヨーゼフは室内ではよく振る舞い、歩けたが、路上ではこれ以上不可能なくらいぎこちなく振る舞った。武器の扱いも下手で、不器用だった。「しかし自分の剣を使う必要があるときには充分勇敢になるでしょう」。さらに改善しなければならない二つの点があった。それは名前に「ムシュー」を附けずに呼ばれたときの手振り (les jeux de main) と癖であった。

マックス・ヨーゼフが登場したとき、挙動の洗練さと器用さが欠けていた。したがって彼はお手本の「エミール」のように人並みであった。彼は健全な人間理解を持ち、誠実で、気立てがよかったが、芸術的な傾向や精神的な活力は無く、「自然で、気取ったところがなかった」。⁴⁶ しかし公子はメジエールに来なかったらしい。それはおそらく良い成績が取れないという心配からで、またそれ故にフォルバッハ兄弟を 2 年前に例外的に聴講生として講義を受けさせたいたのであった。⁴⁷

1773 年夏に遂にケラリオ、ハイスおよびサラベールによるマックス・ヨーゼフの教育が終了した。⁴⁸ クリスチャンとフォルバッハ夫人はマックス・ヨーゼフに適した嫁を探す時だと考えた。ロートリングンのフランス家系の公女ロレーヌ・ブリヨンヌが選び抜かれた候補であったが、⁴⁹ 結婚には至らなかった。⁵⁰ しかし結婚が検討されたことはマックス・ヨーゼフを

勉強と彼の教師達から解放する原因となった、と 1774 年 6 月 3 日にハイスがオーバリンに伝えている。⁵¹ 「自分の力でやってもらい、どれくらい自分を統御できるか見ることになると思われました。つまり彼は 17 歳で自立しましたが、法律はプファルツの公子は 18 歳で成年と規定しています。公爵閣下がこれについて善い助言を受けたか悪い助言を受けたか、また公子の幸福になったかどうかを調べることはできません。ただ、これによって私が重荷を下ろしたことは確かだし、公子の成年宣言以来私の運命は 100 倍も幸福であると感じます。宮廷での教育は世界でも難しい事柄ですが、公子が心を正しく持っていたので、彼の良い素質と彼が私に示した友情が可能なかぎり私の責務を軽くしてくれましたので、公子がいつも、彼にそれが備わっていることに敬服するのですが、大衆から愛され、評価されているのを見ると満足を感じます。私が彼と別れる際に彼宛に書いた手紙の写しを添えさせていただきます。これで私がいつも彼と話していた口調を判断していただけるでしょう」。

添付の手紙の写しにはハイスが公子マックス・ヨーゼフの講義の基礎にした考えをもう一度まとめあげた。「親愛なる公子よ、何よりも強い信心を持ち、宗教の最大の敵である迷信や似非信心を持たないことです。また最近キリスト教を攻撃し人々から慰めを奪っている危険な教義に誘惑されないようにしてください。貴方は貴方の存在の創造主であり、貴方に沢山の善行を与えた神に義務があることを忘れてはなりません ...。

たつての御願ひですが、温情のある人であってください。友達を選ぶときには最大の注意を払ってください。ちゃんとした振る舞いと神への畏敬を持たない者を容認してはなりません。もし友達に誘惑されなかったならどれだけの若者が成功を収めたことでしょうか。このような者達の趣味や嗜好を好んで受け入れ、それに慣れ親しんで生活し、知らず知らずのうちにその信条や原理を身に着けてしまうのです。公子よ、貴方は幸せな素質に恵まれ、知力があり、才能と生まれつきの良い心があります。しかし貴方の素質が幸せなだけに悪い環境ではだめにされてしまいます。君主に利己主義や野心を吹き込むような輩の中では本当に立派な人にはなれません。絶対に早まった判断をせず、貴方が性格を確かめた人だけを信頼しなさい。自分の振る舞いにしっかりと規則を作り、自分の頭で考え、自分の眼で見る習慣を身につけなさい。貴方が幼かったころ経験が浅く、性格に若干の弱さがあると誰かが言ったとしても不思議ではありません。しかし今は貴方が一貫性を保ち、しっかりするかどうか次第です。弱い君主はつねに騙される危険にさらされます。まずへつらって、好かれるようにし、やがて信頼を得ると彼の心を奪い、軛の下に追い込み、しばしば彼は生涯それを背負い続けることになるのです。

ほら吹きの話に耳を傾けてはなりません。その人の話を聞かずに判定してはいけません。また誰かについて貴方に吹き込む悪いことを拙速に信じてはなりません ...。

言って良いことはなんでも言いなさい。多くの社会に蔓延しているお追従や嘲笑によって得をさせてはなりません。他人を悪く言うことはさらに悪口を生むだけです。他人を笑いものにしてはなりませんし、すべての発言を控えめにしなさい。君主が付けた傷は誠実な人の心で長い間出血し、ときには 2 度とかさぶたで塞がることがないのです。

寡黙であり、節度を保ち、注意を払ってください。親愛なる公子よ、貴方は生涯で最も危険な年頃なのです。自分を永遠に不幸にするようなことはしないでください。自堕落な生活は魂から尊厳を奪い、身体を破壊します。その結果は後悔と良心の呵責であり、悪徳者は必ず罰を受けます。つねに自分自身に注意が払えるように振る舞いなさい。なす事すべてにおいて釈明する義務があること、また救わなければならない魂を持っていることを肝に銘じて下さい。呪いや卑猥なことで口を汚してはなりません。貴方に関するかぎり、自分のいるところでそれが起こることを防ぎなさい。それは貴方の尊厳を辱め、傷つけます。正しく、寛容で、礼儀正しく、貴族らしく、思いやりを持ってください。良い人間であり、出来る限り最初の感情を抑制してください。つましくしてください。この性格は永久に重要です。だらしのない生活を送れば、心の安まる時がなく、淵から淵へと彷徨うことになります。

最後に、親愛なる公子よ、いつか貴方は国家を治めるという天意に召されることになります。よい家長になり、貴方に依存する子供たちや家臣を幸せにすることを蔑ろにしてはなりません ...」。ハイスは彼の教え子の出世を見ることはなかった。彼は公子マックス・ヨーゼフの教師の職を終えてから何年も生きておらず、1778 年 4 月 30 日彼はこの世を去った。⁵²

マックス・ヨーゼフは 1775 年デュンキルヒェンで軍歴を開始したが、ケラリオもまた彼の弱点を知っており、近年の教育計画をもう 1 度繰り返すことを切実に訴えて彼を除隊させた。

「貴方は生まれにより陸軍の最高位になるでしょう。貴方はその職に立派に就くと見られています。しかし期待を呼び覚ますだけでは充分ではありません。期待は満たさなければなりません。北方の（スウェーデンの）輝かしい王たちのお手本、戦士のようなフランス国民、家系の公子たちを見ることには慣れているでしょうが、仮借のない後世の人々の評価はすべて貴方がその名に榮譽を与えることを要求しているのです。貴方自身の父親は死者の王国から「息子よ、私は貴方が注意を払い愛さねばならぬ偉大なる王の任務においてプラハの壁の下で戦い、血を流した。ラウターでは軍隊に勝利への道を切り開いた。常勝の軍の将軍として著名で不運な家族の鎖を吹き飛ばした。何時の日か貴方もこの墓所に来るだろうが、名声に包まれて降りて来て欲しい」と声を上げておられます。殿下、道は用意されています。貴方はご先祖の模範に従って貴方の名声をしっかりとした基盤の上に築くことができる幸運な歳ごろです。私と違って貴方はこれまでに得た知識のお陰で賞賛されるでしょう。本当のことを言わなければならないし、隠すこともしませんが、貴方は入り口に立ったばかりです。貴方の将来の人生行路はとてつもなく大きく、努力、勤勉、労働、絶え間ない勉強それに熟考をもってのみ目標に辿り着けます。おべっか使いが貴方の立場の人々に非常によく使う褒め言葉に用心なさい。あるいはそれをもっと良いことをしなさいという要求として受け取りなさい。最も幸福な素質の芽を押し殺してしまうようなよくある話は疑いなさい。軍隊に入ると数学の授業は余計なことだ、それは勉強の邪魔になるだけだ、それは天才と砲術の将校だけに必要なのだ、といったこと、あるいは歴史と政治の授業は政治家にだけ必要なのだ、経験だけが必要なものだ、偉大なコンデ（Condé）は22歳のときに彼の才能だけでロクロアの海鮮に勝ったのだ、といったことを耳にするでしょう。殿下、ここは戦争学をいわば普遍的な学問であり、それに該当しないものはごく少ないということを実証する場ではありませんが、無知と軽率に起因する一般的な意見には注意しなさいと言わなければなりません…。

殿下、貴方が一般の尊敬を誠実さと統一された礼儀正しさによって獲得しないならば、貴方の地位と職務に対応する才能と知識を要求するのは無益なことでしょう。これまで貴方は褒められるにふさわしかったのですが、やがておべっか使いにあらゆる面から包囲されます。これらは卑劣な遣り方で偉い人の信用と善意を悪用する下劣な人たちです。貴方が畏に対して抵抗する力をつけるように忠告します。貴方が世界劇場の第一目に座ることはまったくの偶然です。貴方はただの一人の人間であり、そのような者として神に対し、同胞に対し、自分自身に対して責任があるのです」。⁵⁴

参考文献

- 1 クリスチャン IV 世のマックス・ヨーゼフに宛てた手紙、ツヴァイブリュッケン、1764年3月16日、およびパリ、1764年5月22日。GHA Nachlaß König Max I., 2371/12. Zum leichteren Verständnis für den Leser werden die in Französisch verfaßten Briefe in der deutschen Übersetzung wiedergegeben. Siehe dazu auch F. Schmidt, Geschichte der Erziehung der pfälzischen Wittelsbacher, Berlin 1899, 534.
- 2 Siehe zum folgenden den Beitrag von H. Rall, Die Hausverträge der Wittelsbacher: Grundlagen der Erbfälle von 1777 und 1799, in diesem Band 13-48.
- 3 Zur Geschichte Christians IV. und seiner Familie siehe Adalbert Prinz von Bayern, Der Herzog und die Tänzerin, Neustadt 1966.
- 4 Vgl. zum folgenden Adalbert Prinz von Bayern, Max I. Joseph von Bayern, München 1957, 10ff.
- 5 Vgl. ebd. 18.
- 6 Zu Karl Augusts Erziehung siehe G. v. Böhm, Karl III. August, Herzog von Pfalz-Zweibrücken (1746-1795). Ein Beitrag zu seiner Erziehungsgeschichte (Das Bayerland 23) 1912, 901-905, 921-924, 941-945, 961-963.
- 7 Adalbert Prinz von Bayern (wie Anm. 4) 19.
- 8 J. Kühn, Briefe eines pfälzischen Prinzenerziehers. Aus der Jugendzeit König Maximilians I. Joseph von Bayern und seines älteren Bruders Karl August (Mannheimer Hefte 3) 1961, 27-39, hier 27.
- 9 Keralio wurde 1723 geboren; 1778 wurde er Unterinspekteur der französischen Militärschule (Kadettenkorps). Als solchen lernte ihn ein Zögling der Militärschule von Brienne kennen, der seinen

Weg gemacht hat - Napoleon. Wie sich Napoleon später gern erinnerte, war Keralio ein ausgesprochener Kinderfreund, spielte mit den Kadetten und lud diejenigen, die ihm am besten gefielen, zu Tisch. An Christian IV. war er von Choiseul empfohlen worden. Nach Beendigung seiner Dienstleistung beim Prinz Max wurde er - durch Vermittlung des in Paris einflußreichen Herzog Christian IV. - inspecteur des écoles royales militaires und maréchal de camp (1780). 1783 nahm er seinen Abschied, 1788 starb er. Sieh dazu A. Chuquet, *La jeunesse de Napoléon*, Brienne, Paris 1897, 91, 179, 371, 372.

10 Christian an Friedrich Michael, Zweibrücken 3.4.1761. BayHStA K. bl. 403/II.

11 BayHStA K. bl. 404/5.

12 GHA Nachlaß König Max I., 2360/2. Veröffentlicht bei Schmidt (wie Anm. 1) 408-414.

13 Vgl. zum folgenden Schmidt (wie Anm. 1) CLXXVIII--CLXXX.

14 Vgl. ebd. CLXXVIII; Kühn (wie Anm. 8) 28.

15 Vgl. dazu Schmidt (wie Anm. 1) CLXXVIII.

16 Heis war 1737 in Straßburg geboren; dort war sein Vater als pfalz-birkenfeldischer Rat tätig gewesen. Er studiert an der Straßburger Universität alte Philologie und Geschichte und promovierte 1760 mit einer Abhandlung "De Palatino S. R. I. vicariatu", welche die Aufmerksamkeit Christian IV. auf ihn lenkte. Vgl. dazu Adelung, Fortsetzung und Erziehung zu Chr. Gottlieb Jöchers Gelehrten-Lexicon, 2. Bd., Leipzig 1787, 1880; Kühn (wie Anm. 9) 28.

17 Salabert stammte aus kleinsten Verhältnissen und war ursprünglich Priester im Metzger Distrikt. Es war ihm gelungen, die Gunst der Gräfin von der Leyen in Blieskastel zu erwerben, die ihn an Christian IV. weiterempfahl. Er wird geschildert als "voll Verstand, Witz, Geschmack, und ein wahrer Roué... keineswegs boshaft, feine Sitten, Eleganz der Schreibart, Wahl des Ausdrucks, die Lage des Augenblicks verstand er wohl..." (H. v. Gagern, *Mein Anteil an der Politik I*, Stuttgart 1823, 25).

18 Nach Ansicht des Anonymen Chronisten der "Fragmente zur Geschichte des Pfalz-Zweibrückischen Hauses" war Lanthéné ein "heftiger gallsüchtiger Mann, von Eifersucht und Rechthaberei geplagt", GHA Korr. Akt 466 1/2 fol. 47.

19 BayHStA K. bl. 404/29.

20 Adalbert Prinz von Bayern (wie Anm. 4) 23.

21 Keralio an Maria Anna, Paris 13.3.1762. BayHStA K. bl. 403/21/II.

22 Keralio an Christian IV., Nancy 30.11. 1763. GHA 466 1/2.

23 Vgl. dazu Schmidt (wie Anm. 1) CLXXIII.

24 Vgl. dazu Kühn (wie Anm. 8) 32.

25 BayHStA K. bl. 403/11.

26 Bibliothèque Nationale Paris, Fonds Allemand, Correspondance d'Oberlin Bd. 196.

27 Vgl. dazu v. Böhm (wie Anm. 6) 944.

28 Heis und Oberlin, Mannheim 11. .2. 1764. Bibliothèque Nationale Paris, Fonds Allemand, Correspondance d'Oberlin Bd. 196.

29 GHA Nachlaß König Max I., 2372/4, siehe auch Schmidt (wie Anm. 1) CLXXX f. anm.1.

30 Adalbert Prinz von Bayern (wie Anm.4) 29.

31 BayHStA K. bl. 403/19; vgl. dazu auch Adalbert Prinz von Bayern (wie Anm. 3) 30.

32 GHA Nachlaß Ludwigs I., II B 5.

33 Text des Briefes (in Französisch) bei Schmidt (wie Anm. 1) 535 veröffentlicht.

34 Adalbert Prinz von Bayern (wie Anm. 4) 33.

35 BayHStA K. bl. 403/11.

36 Adalbert Prinz von Bayern (wie Anm. 4) 33.

37 BayHStA K. bl. 403/21/II.

38 BayHStA K. bl. 403/21/II (Brief Keralios an Maria Anna vom 21. 12. 1764).

39 Vgl. dazu Adalbert Prinz von Bayern (wie Anm. 4) 35.

40 Adalbert Prinz von Bayern (wie Anm. 4) 41.

41 Zitiert nach Adalbert Prinz von Bayern (wie Anm. 4) 42.

42 Keralio an Maria Anna, Zweibrücken 4. 12. 1768. BayHStA K. bl. 403/21/II.

43 Adalbert Prinz von Bayern (wie Anm. 4) 48.

44 Christian IV. an Max Joseph, Paris 12. 4. 1772 (Zitiert nach Adalbert Prinz von Bayern [wie Anm. 4] 52). Vgl. dazu auch Schmidt (wie Anm. 1) CLXXII.

- 45 Siehe folgenden Schmidt (wie Anm. 1) 414; vgl. dazu auch v. Böhm (wie Anm. 6) 961, sowie Adalbert Prinz von Bayern (wie Anm. 4) 52f.
- 46 Adalbert Prinz von Bayern (wie Anm. 4) 53.
- 47 Ebd.
- 48 Kühn (wie Anm. 8) 35f.
- 49 Adalbert Prinz von Bayern (wie Anm. 4) 51f.
- 50 Siehe dazu ebd. 69f.
- 51 Bibliothèque Nationale Paris, Fonds Allemand, Correspondance d'Oberlin Bd. 196; vgl. dazu auch Kühn (wie Anm. 8) 36-38.
- 52 Vgl. dazu Adelung (wie Anm. 16) 1881.
- 53 Vgl. dazu Adalbert Prinz von Bayern (wie Anm. 4) 71-73.
- 54 GHA Nachlaß König Max I. 2360/2.